



〔監修〕

松左京／紀田順一郎

海野十三全集

第13卷

少年探偵長



三一書房

海野十三全集

第13巻 少年探偵長 (第14回配本)

1992年2月29日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京
	紀田順一郎
発行者	島山滋
印刷所	日本写真印刷(株)
製本所	東京美術紙工

発行所

株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(3812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-380-92538-2

© 1992年

少年探偵長——目次

海底都市 5

透明猫 99

恐龍艇の冒険 113

予報省告示 127

三十年後の東京 133

三十年後の世界 151

靴らしくない靴 231

少年探偵長	断層顔	怪星ガン
417	397	271
解題「瀬名堯彦」		

537

少年探偵長——海野十三全集・第13卷——

海^{かい}底^{てい}都^と市^し

妙な手紙

僕は、まるで催眠術にかかりでもしたような状態で、廃墟の丘をのぼっていった。

あたりはすっかり黄昏れて広重の版画の紺青にも似た空に、星が一つ出ていた。

丘の上へのぼり切ると、僕はぶるぶると身ぶるいした。なんとまあよく焼け、よく崩れてしまったことだらう。巨大なる墓場だ。犬ころ一匹通っていない。向うには、焼けのこった防火壁が、今にもぶったおれそうなかっこうで立っている。こっちには大木が、黒焦げになった幹をくねらせて失心状態をつづけている。僕の立っている足もとには、崩れた瓦が海のように広がっていて、以前ここには何か大きな建物があったことを物語っている。

悪寒が再び僕の背中を走りすぎた。

僕はポケットに手を入れると、紙をひっぱりだした。それは四つ折にした封筒だった。その封筒をのびして、端をひらいた。そして中から用箋をつまみ出して広げた。

その用箋の上には次のような文字がしたためてあった。

——君は九日午後七時不二見台に立っているだろう。これが第二回目の知らせだ。

これを読むと、僕はふらふらと目まいがした。今日は九日、そしてうたがいてもなく僕は今、この手紙にあるとおり不二見台に立っているのだ。ふしぎだ。ふしぎだ。ふしぎという外はない。

僕は一昨日と昨日とふしぎな手紙を受取ること、これで二度であった。その差出人は誰とも分らない。僕の知らない間に、その手紙は僕の本の間にはさまっていたり、僕の通りかかった路の上に落ちていたりするのだ。その封筒上には、僕の名前がちゃんと記されており、そして注意書きとして、「この手紙は明日午後七時開け」と書いてあったのだ。

昨日開いた第一回目の知らせには「君は今寄宿舎の自室に居る。机の上には物象の教科書の、第九頁がひらいてあり、その上に南京豆が三粒のっているだろう」とあった。

そのとおりであった。ふしぎであった。まるで僕の部屋をのぞいて書いた手紙のようであった。しかしよく考えてみると、この手紙はその前の日にもらったものである。前の日から、翌日の僕の行動が分っているなんて、

全くふしぎである。

ふしぎは、今もそうだ。僕は一時間前、急に決心してこの不二見台へのぼることにしたのだ。それは第二回目の予言をあたらぬものにしてやろうと思い、寄宿舎からは電車にのって四十分もかかる、この不二見台へのぼってみたのである。

ところがどうだ、ちゃんとした中しているのだ。なんとこの気味のわるいことだろう。これが身ぶるいしないでいられるだろうか。

その後、僕は神経を針のようにするどくして警戒していた。それは例の気味のわるい予言的な手紙の第三回目の分がそのうち僕の手が届けられるだろうが、そのときこそ僕はその手紙の主をひつつかまえてやろうと思ったからだ。

ところがその手紙は、僕の予期に反してすぐには届けられなかった。前の手紙がついたその翌日もその翌々日も新しい手紙は届けられず、それではもうおしまいかと思っていたところ、その次の日になって、遂に第三回目の手紙が僕の手許へ届けられた。ただし僕は一生けんめいに警戒していたにもかかわらず、その手紙の主をつかまえることに失敗した。

というのは、その手紙は僕がその日の朝、寄宿舎で目をさましたとき、僕の枕許まくらもとにおいてあったからだ。

ふしぎ、ふしぎ。いったい誰がこんなに早くこのあやしい手紙を持って来たのであろう。僕が何にも知らないで眠っているとき、僕の枕許に近づいてこのあやしい手紙をおいて行く怪人——その怪人の姿を想像して僕は戦慄を禁ずることができなかった。なんとこの気味のわるいことだろう。その怪人は、そのとき僕の寝首をかくこともできたのだ。そう考えると僕はますます気がわるくなり、自分のくびのあたりを手でさわってみた、もしや怪人の刃をうけてそこから血でも出てはいまいかと、心配になったので……。もちろん血は出ていなかった。

怪人の正体は、僕には全く想像がつかなかった。僕はその第三回目の封筒を手にして、しばらくはふるえていた。封筒の上には、これまでと同じに、明日の午後七時に開封せよとの注意がしたためてあった。

僕はその日一日中、あやしい手紙のことでいっぱいであった。夜になって僕はますます胸がくるしくなると同時に、しやくにさわり出した。僕はたまらなくなつて、その夜寝床に入ってから、ふとんの中でその封筒をそつとあけてみた。怪人の命令よりは一日早かったけれど……。

するとその手紙には、「君は十三日午後七時、ふたたび不二見台に立っている。そして君は思いがけない人から思いがけない話をきいて、ふしぎな旅行に出發する事

になる」と書いてあった——僕は頭からふとんをかぶつてねてしまった。

夜があけると、いよいよ十三日、その当日であった。僕は手紙にあるように、決してその当日は不二見台へのはるまいと決心したのであった。

だが、目に見えぬあやしい力は、僕に作用し、僕の足は僕の心にさからつて僕を不二見台へはこんでいった。そして僕は、そこで思いがけない人に出会った。

かわった少年

無遊病者むゆうびやうのように、廃墟はいきょの不二見台に立っていた僕だった。

僕のからだは氷のようになたくなって、西を向いて立っていた。暮れ残った空に、この前来たときと同じに、怪星が一つかがやいていた。

「本間君。やっぱり君は来てしまったね」

僕はとつぜんうしろから声をかけられた。その声をきくと僕は電氣にうたれたようにその場に身体がすくんでしまった。いよいよ出たぞ、怪人かいじんが！ 果して何者？ 壊れた瓦かわらの山を踏む無氣味むきみな足音が、僕のうしろを

まわって横に出た。僕のひざががたがたふるえだした。うつろになった僕の眼に一人の少年の姿が入ってきた。

「本間君、君はふるえているのかい」

僕の気持は、ややおちつきをとりもどした……。

「あつ、君は……」

僕の前に立つてにやにや笑う少年。それは同級生どうきゅうせいの辻ヶ谷虎四郎君つじがたにであった。

この辻ヶ谷君というのは、かわった少年で、少年のくせに額ひたいが禿はげあがつており、背は低いが、顔は大人のような子供で、いつも皆とは遊ばずひとりで考えごとをしているのが好きで、ときには大人の読むようなむずかしい本をひらいて読みふけていた。したがって今まで僕たちは、辻ヶ谷君とはほとんど口をきいたことがない。

その辻ヶ谷君の、かさかさにかわいた大きな顔を見たとき、僕は今までの秘密がなにもかも一ぺんに分ったように思った。

「ふふふふ、本間君。なにもそんなにふるえることはないよ。僕は君が好きだから、君を選んだわけだ。僕は君をうんとよろこばしてあげるつもりだ」

「あんないたずらをしたのは、君だったの」

「いたずらだって、とんでもない。いたずらなんという失敬なものじゃないよ」

と辻ヶ谷君は僕と向きあつて、大きな顔をきげんのわるい大人のような顔にゆがめた。

「僕は君に、すばらしい器械のあることを教えてあげたのさ。実にすばらしい器械さ。未来のことがちゃんと分る器械さ。いや、そういうよりも、未来へ旅行する器械だといった方が適當だろうね」

辻ヶ谷君は、とくいらしく右あがりの肩をそびやかせた。

「未来へ旅行する器械？　うそだよ。そんなものがあつてたまるものか」

僕は信じられなかった。

「ふふふ。君はずいぶん頭がわるいね。なぜって、そういう器械があればこそ、君は三回も、その翌日の行動を僕にいいあてられたんじゃないか」

辻ヶ谷君がなんといおうと未来の世界へ旅行ができるなどというふしぎな器械が、この世にあるうとは、僕には信じられなかった。

「頭がわるいねえ、本間君は……」と、辻ヶ谷君は気の毒そうに僕を見ていった。「まあいい。君をその器械のところへ連れていつてやれば、それを信じないわけにいかないだろう」

「君は、気がたしかかい」

僕はもうだいぶんおちついてきたので、そういつてや

りかえした。

「僕のことかい。僕はもちろん気はたしかだとも。さあ、それではこつちへ来たまえ。そこに入口があるんだから……」

そういつた辻ヶ谷君は、そこにしゃがみこんで、自分の足もとの、こわれた瓦の山を掘りかえしはじめた。しばらく掘ると、下からさびた丸い鉄ぶたがあらわれた。辻ヶ谷君はその鉄ぶたの穴へ指を入れ、上へ引っぱるとふたがとれ、その下は穴ぼこになっていた。辻ヶ谷君は、こんどはその中へ手をぐつとさしこんだ。肘も入った。腕のつけねまで中に入った。顔を横にして辻ヶ谷君はしかめっ面になった。

「どうしたい、辻ヶ谷君」

僕は、すこし気味がわるくなったので、きいてみた。「しずかに……」辻ヶ谷君は、しかりつけるようにいった。

「……うん、あつたぞ」

辻ヶ谷君の青んぶくれの顔に赤味がさしたと思つたら、彼はあらい息と共に穴から腕をひきぬいた。穴ぼこの中からがちゃがちゃという音がきこえたと思つたら、彼の手は鉄の鎖を握つて引っぱりだした。

「これさ。これを引っぱると、君の目玉はぐるぐるまわした、びっくりするだろう。いいかね」

辻ヶ谷君は、その鎖に両手をかけて、えいやッと手もとへひいた。すると、どこだか分らないが近くで、ぎいぎいぎいと、重い扉がひらくような音がした。いや、ほんとうに扉がひらいたのだ。すぐ目の前の小石が瓦のかけらが一方へ走りだしたと思つたら、敷石のゆかが傾き出してその上から地下道へつづいていいる階段が見えだしたのだ。さあその階段を下りて地面の下へ入って行くのだ。「頭をぶつつけないようにしたまえ。君から先へ……」

辻ヶ谷君はそういつて僕の尻をついた。僕は不安になつたが、ここで尻込みしていたのではしょうがないから、思い切つて腰を曲げると、はね橋のようにはねあがつたゆかをくぐつて、地下への階段をふんだ。

もうのつびきならぬ運命が僕をとらえてしまったのだ。不安も恐怖も今はなくなつてしまつて、あとは辻ヶ谷君のさしつける懐中電灯の光をたよりに、どんどん地下へ下つた。階段がつきると、ほんやりと明りのついた廊下が左右へ走つていたが、辻ヶ谷君はその左の方へ進んでいった。その廊下は、その先でもう一度右に折れると、その奥で行きどまりとなつていた。辻ヶ谷君は、その奥まで行つて、手さぐりで壁の上を探しまわつていたが、そのうちに澄んだベルの音が聞こえだしたと思つたら、壁がぱくりと口を開いた。

行きどまりの壁が、すうつと下つて、下にはまりこみ、目もさめるほどの明るい部屋が目の前にあらわれた。形のふしぎな器械がずらりと並んでいる。

「早くこつちへ入りたまえ」

辻ヶ谷君にいわれて、僕は下へ落ちた壁——それは隠し扉であつたのだ——をまたいで中へ入つた。ぷうんといひ匂いがした。ばたんという音がしたので、後をふりかえつてみると、隠し扉が元のようにあがつて、壁になつていた。

タイム・マシーン

ふしぎなこの地下の器械室に足をふみ入れた僕は、おどろきとめずらしさに、ほんやりとつつ立つていた。

「おい本間君。早くこつちへ来たまえ」

僕をこの部屋へ連れこんだ辻ヶ谷君は、そういつて一台の背の高い円柱形の器械の前から手まねをした。

その前へ行つてみると「タイム・マシーン第四号」と真鍮の名札が上にうつてあり、その名札の下には、計器が五つばかりと、そして白い大きな時計の指針のようなものが並んでついていた。

辻ヶ谷君は、その器械の横についている小さい汽船の舵輪だりんのようなものにとりついて両手を器用にうごかし、からんからんと輪をまわした。すると器械の壁が、計器の下のでところで引戸のように横にうごく、そこに人を入れるほどの穴があった。

「本間君。その中へ君は入るんだよ」

「えっ、この中へ……」

「そうだ。それが時間器械なのだ。それはタイム・マシンとも航時機かうじきともいうがね、君がその中に入ると、僕は外から君を未来の世界へ送ってあげるよ。君は、何年後の世界を見物したいかね。百年後かね、千年後かね」

百年後？ 千年後？ 僕はそんな遠い先のことを見たいとは思わない。そんな先のことを見てびっくりして気が変になったらたいへんである。それよりはわりあい近くの未来の世の中が、どうなっているか見たいものである。僕は考えた末、辻ヶ谷君にいった。

「二十年後の世界を見たいんだ」

「二十年後か。よろしい。じゃあ入口の戸をしめるぞ。」

じゃあ、よく見物して来たまえ、さよなら」

「あ、辻ヶ谷君。一時間たったら、今の世界へもどしてくれたまえね」

僕はそういったがすでに辻ヶ谷君はがらと引戸をしめにかかっていたので、その音に僕の声はうち消され

て辻ヶ谷君の耳にはとどかなかったようである。さあ困ったと不安が再び僕の上にはいあがって来た。

いや、その不安よりも、もっと大きい不安が今僕の上に落ちてきた。それは、ばたんと閉じこめられたこのタイム・マシーンの中だ。

それは卵の中へ入ったようであった。卵形かたの壁だ。それが鏡になってるのだ。僕の顔や身体が、まるで化物のようにその鏡の壁にうつっている。僕がちよっと身体をうごかすと、鏡の中では、まるで集団体操をやっているようにびっくりするほど大ぜいの化物のような僕の像がうごいて、同じ動作をするのであった。不安は恐怖へとかわる。

「おい、辻ヶ谷君。ここから僕を出してくれ。困ったことができたのだ。早く出してくれ」

僕は鏡の壁を、うち叩いた。だが辻ヶ谷君の返事は聞えない。僕はのどがはりさけるような声を出して、鏡の壁をどンドン叩きつづけた。

「おほん。何か御用でございましょうか」

聞きなれない声が、後にした。

僕はぎくりとして、後をふりかえった。

ああ、そのときのおどろきと、そしてここに書きつづることができないほどの奇妙な気持ち！ 僕はいつの間にか、りっぱな大きな部屋のまん中に突立っていたの

だ。

そして僕の前に立っているのは、燕尾服えんびふくを着た、頭のはげた、もみあげの長い、そして背の高いおじさんだった。

「ああ、おじさん。今日は。僕は辻ヶ谷君の紹介で、二十年後の世界を見物に來た本間という少年ですがね……」

と僕が名のりをあげると、そのおじさんは顔をでこばこにして、

「ご冗談を。へへへへ」と笑った。

僕は、なにを笑われたのか分らなかった。

「失礼でございますが、あなたさまが少年とはどう見ましても、うけとりかねます」とその老ボーイらしき燕尾服えんびふくの人物が言った。そして美しいクリーム色の壁にかかっている鏡の方へ手を傾けた。

僕は、何だかぞっとした。が、その鏡の中をのぞいてみないではいられなかった。僕はその方へ足早によった。

僕はびっくりした。鏡の中で顔を合わせた相手は、どことなく見覚えのある顔付かおつきの人物だった。年齢の頃は三十四五にも見えた。鼻の下にぴんとはねた細いひげをはやしている。僕が顔をしかめると、相手も顔をしかめる。おどろいて口をあけると、相手も口をあける。ます

ますおどろいて手を口のところへ持つていくと、相手もそうするのだった。僕はあきれてしまった。僕は少年にちがいない。それなのに、なぜこの鏡の中には釣針つりばねひげの大人の顔がうつるのであろうか。

「こののちは、どうぞご冗談をおっしゃらないようお願い申し上げます。そこでお客さま。どうぞお早く御用をおっしゃって下さいませ」

老ボーイは、姿勢を正し、眼を糸のように細くし、鼻の穴を真正面まじょうめんにこつちへ向けて小汽艇しょうきていの汽笛のような声でいった。

とつぜん僕の頭の中に、電光のようにひらめいたものがあつた。それは辻ヶ谷君にさようならをいってから、一足とびに早くも二十年後の世界へ来てしまっているのだ。したがって僕自身も、一足とびに二十年だけ年齢がふえてしまったのだ。だから鏡の中からこつちをじろじろみているあのきざな釣針つりばねひげのおとなこそ正しく二十年としをとった僕のすがたなのであろう。

そう思つて、手を鼻の下へやると、指さきに釣針つりばねひげがごそりとさわつた。

「はっはっはっはっ」と、僕はとうとうたまらなくなつて、腹をゆすぶつて笑い出した。二十年たつたら、僕はこんなきざな男になるのかと思うと、おかしくて、笑いがとまらない。

笑っているうちに、また気がついたことが一つある。

（とにかく僕はもう二十年後の世界へ来てしまっているんだから、その気持になって万事しななければならない。

あの老ボーイに対しても、こっちはお客さまで、大人だぞというふうに、ふるまわなければいけない）

それはちよつとむずかしいことであつたが、この際もじもじしていたんでは、みんなにあやしまれて、かえつて苦しい目にあわなければなるまい。

「やあ。わしはちよつと町を見物したいのである。誰か、おとなしくて話の上手な案内人を、ひとりやとつてもらいたい」

「はあ」と老ボーイは、しゃちこばつて、うやうやしく返事をした。

「それからその案内人が来たら、すぐ出かけるから、乗物の用意を頼む」

「はあ、かしこまりました」

「それだけだ。急いでやつてくれ」

「はあ。ではすぐ急がせまして、はい」

老ボーイは部屋を出て行くとする。そのとき僕は、また一つ気がついたことがある。

「おいおい、もう一つ頼みたいことがあつた」

「はい、はい」

「あのう、ちよつと腹がへつたから、何かうまそうなも

のを皿にのせて持ってきてくれ」

「はあ、かしこまりました」

「これは一番急ぐぞ」

そのように命じて、僕はにやりと笑つた。しめしめ、これですてきなごちそうにありつける。さてどんなごちそうを持ってくるか……。

タクマ少年

老ボーイが持つて来たごちそうのすばらしさ。それは山海の珍味づくしだつた。車えびの天ぷら。真珠貝の吸物、牡牛の舌の塩漬、羊肉のあぶり焼、茶の芽のおひたし、松茸の松葉焼……いや、もうよそう。いちいち書きならべてもしようがないから。

僕は、これ以上お腹がふくらむと破けるところまでたべた。そのとき老ボーイが又やつて来た。

「旦那さま。案内人が参りましてございます」

ようやく案内人が来たか。

「よろしい。では、すぐこれから出かける。あのう、帽子とオーバーとを持つてきてくれ」

ほんとうのところ、僕は自分の帽子やオーバーがこの

ホテルに預けてあるかどうか知らなかった。しかしこうなった以上は、なんでもかんでも知ったかぶりで、じゃんじゃんものをいう方がいいと思つた。

でないと、もしもこの僕が時間器械を使つてこの町へもぐりこんだ怪しい客だと知れたときには、この老ボーイを始めホテルの支配人以外は大概（だいた）慨（がい）をして、僕を外へ放りだすことであろう。そのあとは更に悪化（あくわ）して、僕は警察のごやっかいになるかもしれない。そんなことがない方がいい。だから出来るだけ僕は落着きはらつていなければならぬ。そして何でも心得ているような顔をしていなければならぬのだ。

「お帽子と御オーバー？」

老ボーイはふしぎそうに僕の顔を見返した。

「はて、そんなものはここにはございませぬが、もし特に御入用（ごいりよう）でございましたら、早速（さつそく）博物館へテレビジョン電話をかけまして、旦那さまのお好み（ごこのみ）のものを貸出してもらうことにいたしましょう」

僕はそれを聞いてびっくりした。博物館から帽子やオーバーを借出さねばならぬとは一体何事（なにこと）であろうか。帽子店や洋服店はないのであろうか。——いや待てよ。帽子やオーバーがそれほど古くさいものなら、それをかぶつたり着たりして歩いては、皆に笑われるのかもしれない。「ああ、もう帽子もオーバーもいらぬよ。実は僕はす

こし風邪（かぜ）気味なのでね、外は寒いだろうから温くしようと思つたんだが、急に今気持ち（きもち）が直つて来たから、もう帽子もオーバーもいらぬ」

僕は苦しいいいわけをした。老ボーイはきよんとした顔であつた。僕のいうことが通じないらしい。

もつとも後で分かつたことだが、この町は、家の中も往来も、温度はいつも同じの摂氏十八度に保たれてゐた。

「では、出かける」

僕が部屋を出て行こうとすると、老ボーイは夢からさめたような顔をして、先に立つた。

ホテルの帳場は、はじめて見たが、宮殿のようにすばらしい構えであつた。その中からちよこちよこと一人の少年が走り出た。顔の丸い、ほつぺたの紅い、かわい子（こ）供（ども）だつた。全身を、身体にびつたりと合う黄色いワンピースのシャツとスボン下で包んでいた。かわいそうに、この子は貧乏で、服が買えないのであろう。

「あい、旦那さま。それなる少年が、案内係のタクマ君でございます。おいタクマ君、おそまつのないように十分ご案内をするんだよ」

老ボーイはそういつて少年をひきあわせた。

「こんにちは、お客さま。ではどうぞこちらへおいで下さい」